
マジシャンクエスト

まぁみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジシャンクエスト

【Nコード】

N0349A

【作者名】

まあみん

【あらすじ】

20年前、世界を暗黒の淵に落とし入れた。魔王デスライアを倒した戦士を父親に持つ魔法使いの物語です。悪の賢者サイアスの言った20年の年月が経ち、デスライアは復活し、主人公とその仲間たちによって倒されます。20年前の事件の発端、サイアスの真の目的などが明かされます。

〈序章〉 魔法使いセンリ

〈序章〉

昔、といっても今から20年ほど前、邪悪な賢者「サイアス」の手により、魔界より召還された「デスライア」という魔物がいた。デスライアはサイアスの命により、世界を暗黒に淵に落とすとした。しかし、世界一の強国家リースト最強の戦士「センリ・シュリーバ」

そして、タイルセント国のレインスト家8代目当主「カース・レインスト」が共に力を会わせ、

サイアス、そして、デスライアを倒した。

こうして世界に平和が戻った。

しかし、サイアスは死に際に最後の力を振り絞り、こう言った。

「ふ…ふはは、我が壮大な計画を阻止したつもりだろうが…デスライアは死なせぬ。」

ふっふっふ、我は死ぬが、その死と引き換えにデスライアをより強力に、より邪悪に甦らせる。

…しかし20年もかかるのは悲しいがな。

…ゴフツ…死が近づいてきたか、よかるう、死んでやろうではないか！

この世に闇が再び訪れるのもあと20年だ。」

そういい残しこの世を去った、しかし、この事実を知るものは居ない…

20年後。

ここは、リーストの城、今日もエンリは平和に過ごしていた。
エンリ…彼はセンリを父に持つが、戦士ではない。

人々には散々嫌味を言われたが、彼は魔法使いになれてよかったと思っっている。

「ふう、今日もリゲルトの村の近くで魔法の修行か。」
とそこへ…

く序章く 魔法使いセシリ（後書き）

自分が書いた一つ目の作品です。変な表現、間違った単語多々あったと思いますが、そこは目をつぶってください。

第一話　突然の終わり

「おい、エンリ。」

エンリは振り返り声の主を探した。

「なんだい？セイル、これから修行なんだけど。」とエンリは言った。

声の主は『セイル・マルビーゼ』エンリの幼馴染だ。

「ああ、知ってるよ。リゲルトの村の近くだろ？」

ちよつと休暇とったから村に帰ろうと思ってさ。一緒に行つていいだろ？」

セイルは城の兵士だ、センリも認めるほどの使い手だ。

「ふん、休暇ねえ。珍しいな、お前が休暇なんて。」

そう、セイルは超が付くほどの働き者で休暇も滅多に取らないのだ。

「ちよつとね、一応城の任務も兼ねてるんだよ。」

ああ、なるほどな、と思った。セイルが休暇をとるのは村の近くでの任務の時ぐらいだ。

エンリはあえて任務の事には触れないようにした。

「そういえば、魔法の修行ってどんなことをするんだ？」

セイルは無理矢理、別の話題に変えた。

エンリは任務の事に触れられたくないのだろうと思い、説明を始めた。

「まず、魔法の契約を結ぶ。これは知ってるな？そして大きな岩や、大木に向かってひたすら練習するだけだ。」

とエンリが説明した。

「ふん、で、お前はどれ位強いんだ？」

セイルはエンリの魔法を見たことが無いのだ。

「どれくらいって・・・そうだな、例えば、今、四人の兵士が俺を囲んでも、全員を同時に倒す事が出来るな。」

エンリは三歳の頃から魔法の修行を続けているので、かなりの腕だ。

「ほお！それはすごいな。」

セイルは、半信半疑の目でエンリを見た。でも、エンリはそれでも良かった。エンリにとって自分の強さがどう評価されようとも関心が無いのだ。

この国には兵士がたくさん居る。だからエンリが国のために戦う事も無い。

しかも、この国の王は魔法使いをあまり好いていない。

「あ、この辺だから。じゃあな、たまには親孝行してやれよ。」

「おう、お前も修行ががんばれよ。」

こうしてセイルと別れた。

修行場には師匠がすでに来ていた。

「さあ、今日も修行を始めるか。と言いたところだが、すでにお前はこの国の魔法を全て習得してしまった。

お前に教える事が無くなってしまったのじゃ。これからは自分一人で魔法力を磨くのじゃ！」

エンリは信じられないといった表情でこう言った。

「・・・は？嘘でしょう？師匠、まだ自分は・・・」

ここで師匠がエンリを黙らせてこう言った。

「自分はまだ師匠を越えていない、か？それはそうだ。わしなど40年も修行を続けているのだからな。

それに比べお前はまだ14年じゃ、しかし、魔法の才能には長けておる。もう、1年ぐらいでわしなど足元にも及ばんような偉大な魔法使いになるじやろう。」

そう言い残し師匠は去っていった。

エンリは途方に暮れていた。エンリにとって修行はいわば、この国での存在理由。

それがこの国では学ぶ事が無くなってしまった。

これから、どうすればいいのか・・・

第一話　　突然の終わり　　（後書き）

今回、序章の続きとなる部分を書いてみました。

主人公と幼馴染の会話が多くて、性格が良く現れていると思います
が、どうなのでしょうね？

読んでくださった方は感想お願いします。

第二話　くセイルの提案く

突然の師匠からの修行の終わり、この地で学ぶことは無いと告げられ途方に暮れていたエンリだが、

落ち着いて考え、これから一応一人前の魔法使いとしてどうすればいいのか考えたが、いい考えが浮かばない。

とりあえずリゲルトの村で考えようと思い、リゲルトの村へと向かった。

くリゲルトの村く

「とりあえずセイルを探すか。」そう言っただけでセイルの実家へと向かった。

セイルの家の扉を叩くと、中から「はい」と言う声がした。
この声はおばさんだろうと思った。

「はい、どな・・・」ここでおばさんが言葉を切り驚いたようにこう言った。

「まあまあ、エンリちゃん。久しぶりねえ、元気だった？そうそう、今日はセイルも帰って来てるのよ。」

と言いつつ、中に押し流すように通された。

中には、テーブルで食事をしているセイルがいた。

「よお、どうした？お前、修行じゃないのか？」

エンリは悲しい表情でこう答えた。

「うん、まあそうなんだけどさ。師匠が教える事はもう無いって、この国の魔法は全部習得したらしい。」

セイルは驚いてこう言った。

「えっ！すごいじゃんか、よかったな、一人前になれて。」

しかしエンリの表情には元気が無い。不思議に思ったセイルが、そのことを聞こうとすると、セイルの母親が、

「まあまあ、今はセイルも休暇中なんだし、そういう話は無しで、ね？」

そう言つて、エンリを無理矢理座らせると、次々と食べ物を運んできた。

ここで食べないのも失礼なので、少しずつ食べているとセイルが、
「もしかして、修行が終わって一人前になったのが、嬉しくないのか？」

と聞いてきた。

「うん、なんだかやることがなくなつたみたいで・・・。」

とエンリが答えると、少し悩んでから、

「お前、明日の俺の任務についてくるか？魔法使いがいると楽しうだし。」

とセイルが誘ってくれた。

「え、いいのか？大事な任務なんじゃないのか？」

エンリは心のどこかでこの言葉を期待していた自分が恥ずかしかった。

しかしエンリはそんなそぶりは微塵も見せずにいた。

「うん、まあそんなに大切な任務でもないな、ちよつと危険だから俺が選ばれたつて訳。」

「そうなんだ、で、任務つて？」
とセリ。

「今回の任務は最近この村の北西に発見された洞窟の調査だ。」

そう、ここ最近、洞窟や洞穴が良く見つかるのだ。中には危険なものもあるので、城の兵士が調査をするのだ。

「うん、わかった。で、いつから調査するんだ？」

エンリが尋ねると、

「うん、今日はゆっくり休んで、明日の早朝から調査かな。」
とセイルは言った。

「分かった、じゃあ明日ここに来ればいいか？」

エンリが聞くと。

「おいおい、遠慮すんなよ。泊まってけよ。」

セイルが言ってくれた。

「そうか？じゃあ遠慮なく。」

とエンリ。

「母さん。明日は早いからもう寝るね。寝過ぎすといけないから起こしてくれる？」

セイルが母に頼むと。

「分かったわ、起こしてあげる。」

「ありがと、じゃあおやすみ。」

という会話をして二人は寝室に向かった。

明日起こる事件も知らずに・・・。

第二話　くセイルの提案く（後書き）

一応2話目です。まだまだと言う感じですね。この調子で書き続けるといつ終わるんでしょうか。まだ後二人ほど重要な人物は考えてあるので、30話ぐらいまでいきそうですね。末永くお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0349a/>

マジシャンクエスト

2010年10月8日22時14分発行